

# 追悼・小紋潤



## 弔辞

佐佐木幸綱

九歳も若い小紋潤君の弔辞を書くのはつらい。本当にかなし。

小紋君は一九七〇年に「心の花」に入会した。彼二十二歳。私は三十一歳だった。それから半世紀にわたるつきあいだった。

最初に会ったのは、「心の花」東京歌会だっただろうか。黒一色の服装で、サンダラスをかけていたと思う。学生時代はジャズ・バンドをやっていたベースを弾いていた、初対面のときにそんな話をしたのをおぼえている。元バンドマンが「心の花」に入ってきた。

小紋君は、長く短歌にかかわったが、そして他人の歌集はたくさん作ったが、自分の歌集は長く作らなかつた。二〇一四年十一月、太宰府萬葉会で講演をしたついでに、大口玲子といっしょに歌集刊行をすずめに長崎まで行った。谷岡亜紀が小紋の全作品を書き抜いてくれたのだ。駅近くのホテルで酒を飲み、飯を食った。最後の酒に

なつた。あれから四年、時間はかかったがすばらしい歌集ができた。『蜜の大地』。タイトルもいい。歌は断然すばらしい。

一九七四年、「心の花」は新編集部となり、晋樹隆彦、保坂耕人らとともに小紋君も編集委員となった。以後、四十年近く月に一度は顔を合わせてきたことになる。「心の花」は八二年に「創刊一〇〇〇号記念号」を刊行。九八年に「創刊一〇〇〇年記念号」、二〇〇八年に「創刊一一〇〇年記念号」等々を刊行した。厚いものは四〇〇ページを超える大冊である。歌壇でもっとも充実した記念号が出せたのは、晋樹隆彦、小紋潤というすぐれた出版のプロが「心の花」にくれてくれたからである。

私個人としては、八九年刊行の歌集『金色の獅子』の装幀を小紋君に担当してもらった思い出が忘れられない。私の歌集の中で、たぶん一番立派な装幀である。池大雅の獅子をデザインした金色の箱に入っている。この歌集で「現代詩歌文学館賞」を受賞したりもした。

小紋潤君、ありがとう。お疲れさま。